

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 17 日現在

機関番号：84311

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370150

研究課題名(和文) ジャポニスム期に流出した在欧洲におけるきもの及び日本染織品の保有状況の調査

研究課題名(英文) Japanese Kimono in European Museums from late 19th century to early 20th century

研究代表者

周防 珠実 (Suoh, Tamami)

公益財団法人京都服飾文化研究財団・KCI学芸課・研究員(移行)

研究者番号：70642578

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：鎖国を解いた開国後の日本が急速に海外に知られたとき、日本品は蒐集家などによって収集され、ジャポニスムの波を引き起こした。その中には、当時の他の衣文化に比べて洗練されたきもの及び日本染織品があった。さまざまな影響を引き起こしたことが知られるようになったとはいえ、それら日本染織品類の海外における収蔵状況は、必ずしも包括的に調査されたことはなかった。今回の調査によって、ジャポニスムの時期に流出し、在欧美術館に現存する日本染織品の概要を明らかにした。調査結果は『ヨーロッパに眠る「きもの」 ジャポニスムからみた在欧美術館調査報告』(東京美術 2017年4月)として刊行した。

研究成果の概要(英文)：When Japan was quickly known Western after opening the door, Japanese culture and goods were gathered by collectors and the like, causing Japonism. Among them were kimono and Japanese textiles. Although the fact that Japanese kimono and textiles caused various effects of Japonism became known, the collection these Japanese kimono and textiles in European museums has not necessarily been comprehensively investigated. This investigation leaked out at the time of Japonism and clarified the outline of the existing Japanese kimono and textiles in European museums. The result of the investigation was published as "Japanese Kimono in European Museums from late 19th century to early 20th century" (Tokyo Bijutsu, April 2017).

研究分野：西洋服飾史

キーワード：ジャポニスム 在欧日本染織品 オーストリア応用美術博物館 ウィーン世界博物館 ウィーン民俗学博物館 ハンブルク美術工芸博物館 日本美術技術博物館 入手経路・方法

1. 研究開始当初の背景

ジャポニスム研究において、浮世絵や工芸品が源泉となっていたことは既に言及されているが、きもの及び日本染織品が欧米に与えた影響についての調査研究はまだ端緒を開いた段階である。

ジャポニスムとファッションの関係性について、1994年、展覧会『モードのジャポニスム』(京都国立近代美術館、京都服飾文化研究財団)を開催し、同展カタログや『ジャポニスム イン ファッション』(深井晃子著、平凡社、1994年)などにおいて検証し、また、展覧会は、10年にわたり国内外7都市で開催された。これにより、国内外でジャポニスムとファッションの関係性に、新たな視線が注がれることになった。そのことにより、ファッションにおいては様々な具体例が発見され、影響を受けたものの例は補強された。

しかし、そのイメージの源となった、海外におけるきもの及び日本染織品の収蔵状況は、包括的に調査されたとは言い難い。既に連携研究者である長崎巖によるアメリカの美術館に所蔵されているきもの研究が実施されているが、ジャポニスムを背景とした、きもの及び日本染織品の欧州における影響についての調査としては、始まったばかりである。

本研究以前から、フランスとイギリスにおける調査「ジャポニスムを背景とした着物の欧米における影響についての研究」(2009-2011年度、文化学園文化ファッション研究機構服飾文化共同研究課題採択、深井晃子、長崎巖、稲賀繁美、周防珠実、石関亮)、イタリアにおける調査研究「ジャポニスム期に流出したイタリアの美術館における日本染織品についての調査」(2013年度ポーラ美術振興財団平成25年度助成、深井晃子、長崎巖、周防珠実、小島(古川)咲)を実施し、その先鞭をつけたが、まだ調査研究の余地が多く残されていた。

2. 研究の目的

きもの及び日本染織品が欧米に与えた影響の重要性と広域性を検証するため、19世紀後半から20世紀初頭のジャポニスム期、つまり日本文化が欧米へ強い影響を与えた時期を中心に、欧州に渡ったきもの及び日本染織品の所在を明らかにする。

とりわけ、まだ十分な調査が行われていなかったオーストリア、ドイツ、ポーランドにおけるきもの及び日本染織品の所在を検証することである。

ジャポニスム期に欧州に流失した、きもの及び日本染織品は、現今、その多くが美術館等の専門施設で保管されている。そのため、具体的には美術館/博物館におけるコレクション形成状況、収蔵状況を明らかにする。

海外の美術館/博物館の多くは、日本部門の専門研究者を持たず、また染織品固有の

保管の難しさなどから、日本染織品へのアプローチが拒まれているのが実状である。本調査研究によって、調査対象館に日本関連収蔵品を見直す機会を与え、調査結果をフィードバックする。それによって調査対象館における日本関連収蔵品の見直しを促す。

3. 研究の方法

本調査研究においては、オーストリア、ドイツ、ポーランドのきもの及び日本染織品のコレクションで知られる美術館/博物館、もしくは所蔵している可能性がある館に情報を求め、調査対象品の所蔵の有無を確認した。

調査対象品は、1850年代から1920年代までとし、館に収蔵されたのがこの時代であるもの、もしくは、収蔵時期は該当しないが、海外に渡った時期が該当時期であるものとした。

調査対象品を所蔵する美術館/博物館からの回答をもとに、現地調査を実施する調査対象館として、オーストリア応用美術博物館、ウィーン世界博物館(旧ウィーン民族学博物館)、ウィーン民俗学博物館(以上オーストリア)、ハンブルク美術工芸博物館(ドイツ)、日本美術技術博物館(通称マンガ博物館)(ポーランド)を選出した。

現地調査では、長崎巖と古川咲が調査対象品の撮影と作品内容についての調査を担当し、深井晃子と周防珠実が調査対象品の来歴についての調査を担当した。

本研究以前から実施していた、フランス、イギリス、イタリアにおける美術館/博物館所蔵の調査対象品の収集時期、収集方法などにかかわる来歴由来等について追補調査を周防珠実がおこなった。

全調査対象館に、調査対象品の内容(形状、材質、技法、模様、コンディション、制作年代などの調書)及び調査時に撮影した写真データなどの調査結果をフィードバックした。

調査結果を広く公表するため、本調査研究を含めた調査報告書を一般書籍として、深井晃子、長崎巖、周防珠実、古川咲共著、『ヨーロッパに眠る「きもの」 ジャポニスムから見た在欧美術館調査報告』(東京美術、2017年4月)として刊行した。

4. 研究成果

オーストリア応用美術博物館(オーストリア)

同館は、ロンドンのサウス・ケンジントン美術館(現ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館)に倣って、工芸や産業芸術を重視し、それら具体例の収集を目的として1864年に開館した産業博物館を前身とする。1907

年、旧東洋博物館（1874年設立）と統合された。これにより、アジア・コレクション、ウィーン万国博覧会の出品などを引き継いだ。

調査対象品は、同館の日本染織品コレクションのうち、きもの類 19 点である。本調査によって、東洋博物館旧蔵の小袖類の一部がハインリッヒ・フォン・シーボルト Heinrich von Siebold [1852-1908] の旧蔵品であることを明らかにした。また、ウィーンの美術商であったフランツ・トラウ Franz d. J. Trau [1881-1931] 旧蔵の小袖も所蔵していることを明らかにした。

同館は調査対象品である陣羽織や裂類等も収蔵しており、また、1873年のウィーン万博の際に入手した裂見本帖や、1886年にベルリンの美術商であるワグナー社から購入した裂なども収蔵されているが、本調査では調査が実施できなかったため、次の機会に調査を実施できることを望んでいる。

ウィーン世界博物館（旧ウィーン民族学博物館）（オーストリア）

同館は、フランツ・フェルディナント大公 Franz Ferdinand von Habsburg-Lothringen [1863-1914] が世界周遊をし、1893年の来日時に収集したコレクションが礎となっている。また、1888年にハインリッヒ・フォン・シーボルトが寄贈した日本のコレクションが含まれている。

同館に所蔵されている日本染織品は 99 点であるが、調査対象品は 55 点であった。本調査によって、小袖類 19 点他、能装束、陣羽織といった武家関係の服飾品以外にも、庶民が着用したと思われる染物の裃や下着類なども含まれていることを明らかにした。

ウィーン民俗学博物館（オーストリア）

同館はオーストリアと近隣諸国の民俗文化コレクションで構成されているため、日本のものは無いとの回答を受けていた。しかし、本調査によって、エミーリエ・ルイズ・フレーゲ Emilie Louise Flöge [1874-1952] 旧蔵品の中に、日本製テキスタイル 1 点と紙入れ 1 点が含まれていることを明らかにした。

ハンブルク美術工芸博物館（ドイツ）

同館は、初代館長ユストゥス・ブリックマン Justus Brinckmann [1843-1915] が、ロンドンのサウス・ケンジントン美術館（現ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館）やオーストリア応用美術博物館をモデルとし、1863年から美術館創設のための準備を始め、1874年に開館した。その目的は、アーティストや工芸家、インダストリアルデザイナーのために、歴史的な作品や現代的な作品をサンプルとして集めることだった。

同館の目録によると、日本の染織品は、212 点が所蔵され、調査対象品である小袖や唐織などのきもの類 13 点、裂や袱紗などの染織

品 156 点について調査を実施した。

本調査によって、1873年のウィーン万博においてはじめて日本染織品を購入し、以後、主にベルリンやパリの美術商である、ワグナー社のヘルマン・ペヒター Hermann Pächter [1839-1902] や、ジークフリート・ピンググ Siegfried Bing [1838-1905]、林忠正などから購入していることを明らかにした。

日本美術技術博物館（通称マンガ博物館）（ポーランド）

同館は、1920年にクラクフ国立美術館に寄贈されていた、美術蒐集家フェリクス・ヤシエンスキ Feliks Jasieński [1861-1929] 旧蔵品を展示するために 1994年に開館した。

調査対象品は、ヤシエンスキが 19世紀末から 20世紀初めにかけて、欧州において美術商や仲介人を介して入手したものである。小袖などのきもの類 5 点、帯や帯地など 32 点、袷・横被 3 点、打敷 4 点、裂が貼られた屏風 1 点、計 45 点について調査を実施した。調査によって、きもの類の中には室内着としてのキモノが含まれていることを、帯は主に明治時代のものであることを明らかにした。

また、本調査対象品の中に、画家ジョセフ・パンキヴィッチ Józef Pankiewicz [1866-1940] の《日本女性》（1908年）に描かれている、ヤシエンスキ旧蔵品が含まれていることも明らかにした。

上記の報告と共に、本研究以前から実施していたフランス、イギリス、イタリアの調査結果を取りまとめることによって、在欧美術館に現存する調査対象品である、ジャポニスムの時期に流出したきもの及び日本染織品のおおよその概観を明らかにした。

各館の性質によって収蔵されていた品は異なっているとはいえ、きもの類の多くが、江戸時代から明治時代初期にかけての小袖や打掛、旧大名家などの旧蔵品だったと思われる能装束、陣羽織などであった。収集時期が下るにつれて対象は明治期以降のきものとなる。それらは、パリ・ファッションに反映されたきもの、描かれた作品や書かれた作品に登場するきものがどのようなものであったのか、ということを知る手掛かりとなる。

また、今回の調査では主たる対象としなかった下着類も収蔵されていたことは、民俗学など多様な領域の研究対象となっていたことを示している。

裂類は、小袖類の裂や帯地など、また、打敷などの仏具用裂のほか、袱紗、室内装飾用裂などが多く収蔵されていた。帯地は数片に切られて複数の美術館に売却されたケースも確認できた。

さらに、コレクションの形成期、調査対象品の入手経路・方法について改めて明らかにしたが、入手経路・方法についてはおおよそ次のように大別できる。

1) 日本品を取り扱う店からの購入。

とくにジャポニスムの流布の一翼を担い、日本の美術工芸品だけでなく染織品も取り扱ったピング、林を介して、パリから染織品が美術館や収集家の手に渡っていたことは以前から知られていたが、その実態を明らかにした。

2) 万国博覧会後の売り立てによる購入や寄贈。

19世紀後半欧米各地で開催された万博は、ジャポニスムが広がる要因のひとつとなったが、一方で近代的な貿易に乗り出そうとしていた日本にとっても、万博は有益な商業の場でもあった。当時、欧米諸国にとって繊維産業は国家的な重要産業であった。産業博物館を前身とする館は、万博後に売り立てられた日本染織品を購入し、日本側は見本裂帖などを開催地の美術館に寄贈している。

3) 収集家からの購入や寄贈。

収集家自身が日本を訪れた際に入手したもの、美術商等から購入したものが後に美術館に寄贈・購入された例である。

以上の詳細な報告は、一般書籍として刊行することによって、一般に公開した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 3 件)

深井晃子、基調講演「ファッションとしてのジャポニスム - 絵画の中のきもの」、シンポジウム「ファッションとアートにみる東西交流の諸相」、横浜美術館/京都服飾文化研究財団/ジャポニスム学会、2017年5月27日、横浜美術館レクチャーホール

周防珠実、講演「明治期の輸出室内着」、服飾美学会平成29年度大会、2017年6月3日、東京家政学院大学

周防珠実、講演「海を渡った小袖 - 西洋が憧れた日本」、「旅する小袖 - 時空を超える日本のデザイン」展トークイベント、2017年6月17日、千總ギャラリー

〔図書〕(計 1 件)

深井晃子、長崎巖、周防珠実、古川咲共著『ヨーロッパに眠る「きもの」 ジャポニスムからみた在欧美術館調査報告』、東京美術、2017年、pp.1-159

内訳は、以下のとおりである。

*深井晃子、「ジャポニスムの時代の「きもの」在欧美術館所蔵染織品調査報告」、pp.4-11

*長崎巖、「明治期における日本の染織品の海外流出」、pp.12-19

*周防珠実、「各国における「きもの」および日本染織品所蔵状況 - フランス - パリ装飾芸術美術館 (旧モードとテキスタイル美術館)、フランス国立ギメ美術館、パリ市立衣装美術館 (ガリエラ宮美術館)、リヨン織物装飾芸術博物館」、pp.21-38

*周防珠実、「各国における「きもの」および日本染織品所蔵状況 - イギリス - ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館、スコットランド国立博物館、グラスゴー市立ケルヴィングローブ美術館」、pp.39-62

*古川咲、「各国における「きもの」および日本染織品所蔵状況 - イタリア - 国立ヴェネツィア東洋美術館、ローマ国立ルイーダ・ピゴリーニ先史民族学博物館、ローマ国立ジュゼッペ・トゥッチ東洋美術館、アントニオ・ラッティ財団テキスタイル美術館、イブレア市立ガルダ美術館、pp.63-85、88

*ラウラ・ディミトリオ、コラム「ガイド・ラヴァシの絹織物デザインに見る日本の影響」、pp.86-87

*周防珠実、「各国における「きもの」および日本染織品所蔵状況 - オーストリア - オーストリア応用美術博物館、ウィーン政界博物館 (旧ウィーン民族学博物館)、ウィーン民俗学博物館、pp.91-108

*古川咲、「各国における「きもの」および日本染織品所蔵状況 - ポーランド - 日本美術技術博物館 (通称マンガ博物館)」、pp.111-116

*周防珠実、「各国における「きもの」および日本染織品所蔵状況 - ドイツ - ハンブルク美術工芸博物館、pp.117-128

*収蔵品リスト、pp.129-153

*深井晃子、「まとめに代えて」、pp.154-155

〔産業財産権〕

出願状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 件)

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

周防珠実 (SUOH TAMAMI)
京都服飾文化研究財団・KCI 学芸課・キュ
レーター
研究者番号：70642578

(2) 研究分担者

深井晃子 (FUKAI AKIKO)
京都服飾文化研究財団・理事/KCI 学芸課・
名誉キュレーター
研究者番号：50309431

(3) 連携研究者

長崎巖 (NAGASAKI IWAO)
共立女子大学・家政学部被服学科・教授
研究者番号：20155922

(4) 研究協力者

古川咲 (FURUKAWA SAKI)
共立女子大学博物館・学芸員